

1930年代植民地都市京城の「モダン」文化

白 恵 俊

0 はじめに

「1930年代」の植民地首都京城，そこに植民本国の「日本を經由」して流れ込んでいた，いわゆる「モダン」文化に当時植民地の住民たちはどのように反応していたのか。本稿は，「1930年代」「日本經由」の「モダン」文化という，三つの括弧付き標語の意味を相互関連的に交差させる中で，京城における日本の「モダン」文化の受容様相を素描する。まず，どうして本稿が，日本から流入され，京城の人々の日常生活にまで波及されることによって形成された新しい近代文化を，「モダン」という表現を用いて把握しようとするのかについて述べて置かなければならない。それは一言でいえば，1930年代の京城の新しい文化を，モダニティ，モダン，モデルニテ，近代性，現代性などの歴史哲学的，芸術史的，美学的意味との関連を考える以前に，人々の感覚的体験世界との関連の中で捉えるためである。髪を長く伸ばした男，パーマをかけた女がカフェーでコーヒーを飲みながら映画を論ずる若者の流行，風習が，その新しい文化の身体性であったのである。カフェー，百貨店のショーウィンドー，ハリウッド映画など，京城の「モダン」文化とは，当時人々にどのように認識され，また若者たちの憧れの対象になったのだろうか。こうした京城と東京の「モダン」文化に対する人々の認識を特に韓国のモダニズム文化言説を通して探ることが本論議の目的である。とにかく本稿では，「モダン」という概念を，日本から流入され，京城の人々を魅了した「1930年代」の新しい文化を指す表現として用いることにする。

ここで「モダン」文化の修飾語として「日本から」を用いたのは，単に朝鮮に流入された近代的「モダン」文化の殆どが日本を經由していたことだけを強調するためではない。実際，これまでの植民地期朝鮮のモダン文化に関する認識は，「日本」というルーツに含まれている問題性を多少看過していたといえる。すなわち，本稿において「日本經由」という限定は，西欧の文化が日本を経て朝鮮半島に伝えられたという事実を明らかにするだけでなく，それ自体，朝鮮の「モダン」文化の性格を規定する決定的な要因にもなる，という事実を明らかにするためでもある。

京城において日本の「モダン」文化は，単に西欧と朝鮮とを媒介する役割を担当したのではない。1930年代の京城の「モダン」文化とは，1923年の関東大震災後再建された東京の「モダン」文化が植民地支配に伴って流れ込んだものである。朝鮮において「モダン」文化は，1920

年代後半から徐々に入ってきたが、それが本格的になったのは1930年代のことである。その背景には、大震災以後に再建された「東京」と、それを見本に構築された「京城」が存在していた。そして、完全に植民地都市に変貌した京城に流入された「モダン」文化は、人々の日常生活にまで浸透するようになったのである。

さて、そうした京城の「モダン」文化状況の中で、様々な文化言説が生産されるようになった。本稿では、京城と東京の「モダン」文化の様相を題材にしている文化言説を取りあげ、「モダン」文化に対する当時の人々の認識や感覚を読み取りたいと思う。文化言説という分類は、曖昧ではあるものの、ここでは主に1930年代の京城の「モダン」文化の背景に、それに対する人々の意識を取り扱った文学テキストや新聞、雑誌の記事などを分析の対象にする。

ということで、本稿では、まずモダニズム文化言説の生産の重要な契機になった京城という都市の変貌を検討し、そこに流入された「モダン」文化の様相やその文化的状況の中での人々の認識の変化、などを当時の文化言説を通して問題化することにする。

1 植民地都市京城の「^{ナムチョン}南村」と「^{ブクチョン}北村」⁽¹⁾

宮殿を中心にした城郭都市漢城から植民地都市京城へと、という都市の風貌や生活システムの変化は、日本との地政学的な関係の中で理解することができる。その関わりは、朝鮮半島が完全に植民地化される以前の段階にまで遡る。朝鮮に日本公使館が設置されたのは1880年であり、2年後の1882年に公使館は倭城台へ移転された。それが日本人居留地形成の始まりとなる。そして日露戦争後に日本人が増加すると、居留民団法にもとづいて1906年に京城居留民団、1907年に龍山居留民団が設立され、1910年に両国体は合併することになる。やがて1905年の統監府設置とともに1906年には京城理事庁の設置も余儀なくされ、さらに1910年の日韓合併後には京城府が発足した。この「京城府」というのは総督府の法令（1910年10月1日、総督府令第7号）による改称であって、改称前の名は「漢城」であった。京城府は、解放以後「ソウル特別市」に改称される1946年まで、植民地朝鮮の首都名として用いられた。

植民地の首都名の改称から歩み始めた日本による都市改造は、朝鮮総督府が発布した1912年11月の「京城市区改修予定路線」、1913年2月の「市街地建築取締規則」などの法令によって、拍車をかけられた。それで、合併直後の行政機構は城壁内に「部」、城外に「面」を置いた五部八面制が布かれ、日本人を対象とする従来の居留民団と二本立ての行政となった。しかし、1914年に五部八面制が廃止され、行政は一本化された。その後も、府内の町名は「洞・町」などに分けられ、「内地流の町名は多くは従来の内地人居住地を中心とする地方」につけられた。それで、京城府内に著しく増加した日本人居留民によって新たに作り出された日本流の「町」という名は、朝鮮の伝統的な「洞」という名と入り交じって使われていたのである。それは単に名称の変更や、居住地域の区分だけを意味するものではなかった。つまり、都市生活システムの中の植民地的差別までも、その名称の変更は象徴的に表していたのである。

その後、1920年1月より施行された日本の「都市計画法」と1921年8月の「京城都市計画研

研究会」の創立などを契機に、1926年から1930年まで3次にわたる「京都市計画案」が作成された。1930年代に入ると、それらの都市改造計画は本格的に実施されるようになる。特に、1934年6月20日付の総督府令第18号の朝鮮市街地計画令は、1936年の府拡大の実施につながるものであった。それによって、京城は、植民地期最大の転機といえる、いわゆる「大京城」に生まれ変わるのである。その結果、従来に比べ京城の面積は3.8倍、人口は1.7倍の63万7千人となり、日本の大都市と併せて比較すると面積において横浜に次ぐ第6位、人口においては第7位という大都市となった。その後、ピークの1942年には人口が111万人を超えたとされる。

ここで注目しなければならないのは、植民地都市建設計画による近代都市化が京城の都市構造に何をもたらしていたのか、ということである。結果的にいうと、それは京城の二分化、すなわち植民者生活地域と現地住民生活地域との分割という形で現れることになる。もちろんそれは植民地都市の開発（エクスプロイト）という現象に深く関わるものであろう。これまでの京城に対する都市研究では、植民地都市の持つ特徴として支配者と被支配者の居住地域の分化、行政的・軍事的支配機構の集中などによって生まれる地域的二重構造が指摘されてきた。⁽²⁾ すなわちを清溪川境界に、北部の朝鮮人居住区と南部の日本人居住区との分化という二重構造が、京城という都市の身体を特徴付けていたのである。もちろんこうした二重構造は、居住地域だけではなく、商業圏や娯楽施設の分離までも性格付けるものであった。たとえば、朝鮮人向けの繁華街は北の鐘路通り、日本人の中心街は南の本町通り・黄金町通りであった。

京城の二分化という植民地的差別の状況は、当時の人々（京城府民）の目にどのように映っていたのだろうか。『四海公論』（1935年10月号）に載せられた柳光烈^{リュウクワンリョル}の「大京城の点景」という文章は、京城の二重構造に対する当時の、いわば生活感覚をリアルに伝えている。

昔の京城と今の京城を比較してみると、それは誰の目であれ、世の中が桑の畑が変わるように変わっていくことをしみじみ感じさせる。⁽³⁾ 今のソウルについてよく言われることとして、京城では南村が優秀であるとかまたは、京城府会や大勢の朝鮮人が読む新聞には都市の施設を南村に偏重しなくて北村にも同等の機会を与えろという記事が載せられたりする。これは南村の勢力が優秀であることを証明することである。南村というと京城の旭町、本町1丁目から5丁目までを示す言葉であって、朝鮮人は通称「泥岬（ジンゴゲ）」と呼ぶ。この「泥岬」は以前の明洞、大龍洞、落洞、長洞、會洞、筆洞などの地域を示すのであって、雨になると道が泥だらけになったので俗称「泥岬（ジンゴゲ）」と呼ぶようになったのである。ここはもともとソウルの貧民のうち極貧者が集まって住んでいた所であったが、朝鮮統監府が設置され、それを中心に日本内地人の商店街が形成されて30余年の間、やっと今日の繁栄を迎えるようになったのである。⁽⁴⁾

引用の記述で、日本人居住区と朝鮮人居住区をそれぞれ表わす名称として「南村」と「北村」が用いられている。ここで指摘しておきたいのは、これらの名称が、当時朝鮮人向けの雑

誌や新聞の記事に頻繁に登場していて、日本人による文献からは見当たらない、ということである。それは、当時「南村」「北村」という名称が朝鮮人に限られて通用されていたことを意味すると同時に、単純に居住地域の分割だけを示すのではないことを意味する。これらの名称には、都市の差別的二重構造に対する被植民地人としての京城府民の意識までもが刻印されている。すなわち、「南村」「北村」という名称は、市街・道路・産業・経済など都市の様々な側面に露呈される京城の二重性を、克明に照らし出す言葉でもあったのである。こうした比率の不均衡は、時間が経つにつれて深化していく。1930年代に入っても、このような状況は一層深化・持続されていたが、次の引用からもそれを窺うことができる。

このように、北村には店もあんまりないし、値段も高くて、若いインテリ男女や富裕な家庭の婦人たちは当然買い物をするために南村へ出かけた。電車に乗って往復してもその電車代以上節約できるし、品質もはるかに良いというのである。それに、丁子屋・三越・三中井のような所には立派な食堂があって美味しい飲食を安く食べられるので客が押し寄せた。ある時、このような百貨店や百貨店の食堂に寄ってみると客はほとんどが朝鮮人であった⁽⁵⁾。

日本人居住・商業地区に朝鮮人が押しかけた理由については、上記の引用からもある程度説明されているものの、より詳細に検討される必要があると思われる。なぜかという、朝鮮の人々、特に若いインテリ男女や富裕な婦人たちが「南村」に憧れたのは、単に安くて、品質がよくて、美味しいという理由だけではないと思われるからである。彼らにとって「南村」と「北村」はどのような空間であり、この二つの空間は往来していた人々にどのような認識を芽生えさせたのだろうか。

確かに当時の資料を調べてみると、日本人の居住地区と朝鮮人の居住地区には経済的・環境的な側面において相当の格差があったことに気づかされる。孫禎睦^{ソンジョンモク}の『日帝強占期都市化過程研究』での調査に基づいて、「南村」と「北村」の経済力を比較してみたい。孫は両方を比較するための基準として、1917年当時の京城の総戸数と営業税納付の状況を具体的に取り上げている。1917年当時の京城の総戸数は58,063戸として、そのうち朝鮮人の戸数は39,929であり、日本人は17,578であって、朝鮮人と日本人の比率は7対3であったという。しかし、営業税納付者は朝鮮人が6,108人であるのに対して日本人は5,232人で、その比率は54:46である。また、その納付額をみると、朝鮮人6,108人が納付する営業税の総額は31,735ウォンであるが、日本人5,232人の納付額は46,457ウォンとしてその比率は4対6である。すなわち、京城市民の3割だけである日本人が営業税総額の6割を納付していたのである。これは、当時京城の商業権が日本人によって掌握されていたことを意味する。ほかにも「南村」と「北村」との格差や両地域の不均衡は、都市施設に関する調査を通じても検討することができる。都市施設における「南村」と「北村」の格差は、朝鮮総督府の「京城市区改修予定路線」(1912年11月6日)に端を発する一連の「市区改修事業」に既にその予兆が示されていた。それは、植民地支配の円滑

化を求めた、植民者生活圏と現地住民の生活領域の分離政策によって、次第に深刻化していた。朝鮮総督府の「市区改修事業」とは、今日の都市計画事業に該当するもので、1912年11月6日に「京城市区改修予定路線」（総督府告示第78号）が発表された。この路線は最初の31個条で発されたが、その後5回に渡る改定によって47個条に増えることになった。この事業を発表した総督府は、1913年から1929年までの17年間にかけて道路・広場の工事に力を注いだ。けれども、この市区改修47個路線のなかで、工事に重点がおかれ、進行された地域は、主に「南村」の南大門一帯、退溪路と乙支路一帯、太平路一帯であって、「北村」の場合は工事自体が大きく遅延されていた。それは植民地政策の当然の結果でもあったが、他に土木事業・衛生事業などの分野でも「南村」と「北村」の差別は顕著であつた。⁽⁶⁾ また、公共建物の配置における「南村」の偏重は深刻であつて、1930年まで「北村」に位置した公共建物は朝鮮総督府しかなかった。たとえば、「南村」に位置していた主要公共建物としては、京城府庁、京城府民館、京城裁判所、朝鮮銀行、殖産銀行、京城郵便局、東洋拓殖株式会社、京城日報社、京城商工会議所、京城電気株式会社、総督府京城図書館、総督府商工奨励館、朝鮮ホテルなどが挙げられる。これらの建物は二階以上の近代式建築物として、主に1920年代から1930年代に建てられ、その結果、京城、特に「南村」地域は近代都市として変貌を遂げていたのである。⁽⁷⁾ これらの建物または施設の性格や用度を見ると、政治・経済・司法は勿論、言論や通信までもが「南村」に集中していることがよく分かる。極端に言うと、植民地都市京城における近代都市への変貌というのは、あくまでも日本人居住区・商業地区である「南村」だけのことであつた。

一方、当時日本からの「モダン」文化に直面した植民地住民たちの認識を解明するためには、朝鮮人住居地域であつた「北村」の状況に関しても正確に把握しなければならない。1920年代から1935年までの朝鮮人社会は、極度の貧困状態が持続されており、マスメディアで草根木皮、飢餓、乞食などの言葉が最もよく使われた時期でもあつた。⁽⁸⁾ 朝鮮総督府通計年譜や雑誌『朝鮮及満州』（1935年5月号）には、農民の40%以上、都市住民の60%以上が貧困層であると報告されている。ここで税金を納付しない貧困層は、朝鮮総督府によって四つに分類されていたが、細民・窮民・浮浪民・乞食がそれであつた。細民は生活が困難な状態ではあるものの他人の援助をもらわなくても最低限の生活は維持できる者、窮民は生活が非常に厳しい状態で他人の援助なしには生活自体ができない者、浮浪民はあちこちを徘徊する住居と職業のない無宿者、乞食は浮浪・徘徊しながら自分や家族のため赤の他人に常業的にももらいをする者、とそれぞれカテゴリー化された。しかし、ここで注意しなければならないのは、都市住民の60%が貧困層であるといつても、当時京城居住の日本人を除くと結局朝鮮人の大多数が貧困層であつたということになる。

近代都市の風貌を誇る「南村」の光、朝鮮人都市貧民がうごめく「北村」の暗さ、その明暗の狭間で、植民地住民たちは、京城を体験していたのである。当時の人々にとって「南村」と「北村」との格差の幅が広くなればなるほど、両方は不可分な空間として実感されるようになる。北村の暗さによって、南村の光はより一層眩しく感じられたかもしれない。現実的に住民

たちの感受性は、近代式建物や「モダン」文化に充満している「南村」と、貧しくて汚い自分たちの家、または部屋がある「北村」とを、往来する中で形成されたものである。いいかえれば、幻想と現実の間で惑わされていたのである。植民地住民たちが「南村」で見た幻想が鮮明であればあるほど、「北村」の現実はますます厳しく感じられたし、その現実から逃げるためにはもっと鮮やかな幻想を求めるしかなかった。それで、結局は幻想と現実、「南村」と「北村」を彷徨いながら、どこにも属すことのできない宙吊りの状況に自分を位置させるようになる。すなわち、彼らは「南村」「北村」というふたつの空間の往来を通じて、自分たちのアイデンティティーを獲得したり、喪失されたりしなければならなかったのである。植民地都市京城における「モダン」文化は、京城の二重構造に基づいて流入されたが、それと同時に、京城の二重構造を一層確固たるものにもさせたのである。

2 「モダン」文化の重層性

日本から流入された様々な「モダン」文化が、植民地都市京城の人々の日常生活にまで浸透したのは1930年代のことであった。1920年代までの朝鮮の近代化は、知識人たちに主導された啓蒙的なプロジェクトとして展開された。しかし、「民族改造」、「文明開化」という啓蒙言説による民族中心主義の近代化は、植民地の支配・被支配の現実状況のなかで挫折させられてしまう。1930年代に入ると少数の知識人や先駆者たちによる、民族主義的な近代化の主張は社会的波及力を失って、その代わりに、日本から流入された様々な「モダン」文化が一種の流行のように大勢の人々に日常の現実として受け入れられるようになる。京城の大衆にとって近代化、もしくは現代化は、もはや啓蒙的な意識とはかけ離れて、日常生活の文化現象のレベルで感覚されたのである。「モダン」という言葉は、このような社会全般の文化的現象を指し示す時代用語として登場した。「モダン」は、日本での使い方と同じように、「時代の先端」という意味が含まれていたが、軽薄な流行を示す表現としても使用された。特に、知識人たちにとって「モダン」の日常化は一般的に社会の否定的価値として認識されており、新しい生き方のパターンを志向するいわゆる「モダン族」に対して、彼らは軽蔑や嘲笑をもって応じた。彼らにとって、「モダン」とはもはや時期区分の概念ではなく、朝鮮の都市社会の大衆的流行や風潮をあらわす表現であった。すなわち、当時朝鮮社会のメディア言説の中での「モダン」は、「現代」という意味よりは、「1930年代」を示す固有名詞として、特に一種の流行現象を示す概念として一般化されていた。次の引用は、『別乾坤』（1930年1月号）に載せられた、壬寅生（生まれた年を用いた仮名一論者）の「モダニズム」という文章である。そこから「モダン」文化に関する当時の知識人の認識を窺うことができる。

Modern 即ち、現代という意味である。（中略）現代という言葉は普通名詞である。しかし、「モダン」という言葉は20世紀の現代——20世紀のなかでも1920年——いや、1925年——いや1930年——を特別に示す言葉である。従って、「モダン」は固有名詞である。過去

において今世紀を現代、即ちモダンと呼んだのと同じように、これからもその今世紀を現代すなわちモダンと呼ぶのであろう。しかし、その現代のそのモダンは普通名詞として呼んだまた呼ぶモダンである。でも、我々が今呼んでいるモダンは1930年を中心にして新しく生まれた社会的条件の反映である一部の人間の生活のイデオロギーを示す。「モダニズム」の「モダン」は今の我々が一度しか使えない固有名詞の「モダン」である。⁽¹⁰⁾

以上のように朝鮮において「モダン」という表現は、「1930年」という特別な時期を指し示していたのである。もちろんその背景には、1930年に入って日本から流入された様々な「モダン」文化が、近代都市京城の大衆の間に敷衍しつつあったという社会的な状況が置かれている。一方、日本の言説においても「1930年」とは特別な意味を内包していた。たとえば、大宅壮一は「1930年の魅力」という文章で当時の状況を次のように伝えている。

では、「1930年」のどこに魅力があるのだろうか？ まず第1にそれは数字的な感覚からくるらしい。1928年から1929年に移ったところで最後の8が9になっただけだが、1930年になると、すっかり感じが違ってくる。つまり、19世紀から20世紀になったようなものだ。(中略)民衆は盛んに「1930年」に呼びかけている。なにかしらそのなかからすばらしいことが生まれてきはしないかと夢想している。まさにこれは「1930年の幻想的展望」である。したがって、「1930年の魅力」は、逆説的にいえば、今日の民衆がいたるところで、疲労し、けん怠し、困ばいし、絶望し、苦闘しているという事実⁽¹¹⁾に存するのである。

日本の場合も、「1930年代」とは、新しく再建された近代都市東京を舞台とした「モダン」文化を特権化する時代概念である。周知のとおり、1923年の関東大震災によって灰燼に帰した東京は、震災後の帝都復興事業（1924～1930）の完成によって様相を一変した。すなわち、「日本初の大々的な都市計画」であった帝都復興事業実施の結果、東京の中心部はその面目を一新したのである。⁽¹²⁾このような都市空間の変化は人々の生活や価値観にも大きな影響を及ぼし、そこで生まれた文化がいわゆる「モダン」文化である。日本のジャーナリズムや知識人の言説においても、その「モダン」文化に関する評価はあまり肯定的なものではなかった。「モダン」文化とは、ただ近代人がその文化状況の中で生き残るために発明された感覚的な生活哲学、享楽哲学、または消費文化として認識されていたのである。

ここでひとつ強調しておきたいのは、日本の「モダン」文化と朝鮮のそれとが、同じく「1930年代」という特権化された時代の中で、歩調を合わせていたということである。それは、「モダン」文化が日本から朝鮮へ流入したといっても、朝鮮と日本の「モダン」文化がほぼ同時的に進行されたことを意味する。「1930年代」という時期は、関東大震災以後の東京を復興都市として再建された時期であると同時に、京城が近代都市としての風貌を備えるようになった時期でもある。

1920年代後半から加速化された京城の近代都市化は、1930年代には不完全とはいえ、都市としての骨格を備えるようになった。近代都市化にともない、京城には急激な人口集中の現象が招来され、20万～30万であった京城の人口が1935年を基点にして40万に至り、30年代後半になると100万も超えるようになる。京城は制度的な側面でも近代都市として形態を備えるようになって、教育制度をはじめ、イデオロギー的国家機構としての様々な制度的な措置が整備されるようになった。そして、文化的な側面でも新聞の学芸欄、雑誌の文芸欄と広告欄を中心に映画、演劇、美術、音楽など現代芸術に関する関心が高揚された。それに、何より近代化の外観を形成させたのは、毎日のように増えていく街の近代式建築物や看板であった。もちろん、京城の都市外観を変化させた近代式建物は、大半が日本の技術や資本の導入によって建てられたものであったし、看板によって宣伝される商品も殆どが日本から輸入されたものであった。そのことは、京城の近代都市化自体が日本による植民地経営の一環として推進されたことを考慮に入れると、あまりにも当然のことであったかもしれない。植民本国の都市計画によって変貌された京城という近代都市に、日本から流入された様々な「モダン」文化が、人々の日常生活にまで浸透したのである。すなわち、京城における都市の近代化、「モダン」文化の大衆化は、植民本国から絶大な影響を蒙ることで展開されたのである。このような事実は、京城の「モダン」文化が、当時民族主義偏向の知識人たちによって批判された根拠にもなる。

一方、「モダン」という現象を新しい日常として再組織しようとする試みは、日本留学や近代教育を通じて西欧の文物に接することができた新知識人によって触発された。彼らにとって「モダン」の実現は、個人の意識と行動に自由を付与することから出発するのであった。彼らは、このような意識と行動が社会に自由と平等を、そして文化的な高揚をもたらすと思った。この際、彼らの理想的な「モダン」の見本は、当然日本、特に東京から求められた。しかし、東京の「モダン」文化、読書の中に理想的「モダン」文化を体現するには、京城という植民地都市の物質的条件はあまりに貧弱なものであった。したがって、結局日本の「モダン」文化を標榜しながら朝鮮の「モダン」文化を担おうとした彼らの試みは、朝鮮の「モダン」文化を奇形的に展開させる、という批難を受けざるを得なかったのである。

それでは、1930年代の京城の「モダン」文化を受容・享受する人々の「モダン」な生活を窺える文学テキストを取りあげて、当時の「モダン」文化に関する認識や受容の様態を考察したいと思う。次の引用は、^{イサン⁽¹³⁾}李箱の「一番目の放浪」の一部である。そこには、それ自体「モダン」文化の一つでありながら、「モダン」文化の流入を可能にさせた媒体でもあった、日本から入ってきた雑誌に対する認識が、記述されている。

『セルパン』を取り出す。アポリネールが楽しんで書くテーマ小説である。「暗殺された詩人」私は神秘的な古代の匂いを漂わせる主人公から弁慶を連想する。しかし、それは詩人であるから、浪漫主義者であるから、あの弁慶のように——決して——華麗ではないはずである。(中略) ふと彼がページをめくる音が聞こえた。これはまたどうなったことであろう。彼も

一生懸命本を読んでいる。それに眉間に皺まで寄せているのではないか。『キング』——この天真爛漫な男の心を痛めるどんな記事がその中に載せているというのだろう。⁽¹⁴⁾

『セルパン』⁽¹⁵⁾と『キング』⁽¹⁶⁾とは、周知の通り、日本で刊行されていた雑誌として、両方ともに当時京城においても読者層を持っていた。まず、李箱の『セルパン』と『キング』に対する認識からは、微妙な格差を感じ取ることができる。『セルパン』を読みながら、考えを巡らしていた李箱は、しつこく声をかけられ、結局汽車の隣の席に座るようになった「彼」が深刻な顔で『キング』を読んでいるのを眺めている。李箱には「彼」がどうして『キング』を真剣な顔で読んでいるのが理解できない。なぜかという、李箱にとって『キング』はただの興味本位の大衆雑誌にすぎなかったからである。それでは、そうした認識はどのような経路で形成されるようになったのであろうか。それは、李箱自身が直接『キング』と『セルパン』とを比較する観点から読んで得た結果というよりは、当時日本においての『キング』に対する知識人たちの軽蔑的視線や言説を間接的に体験したからであると思われる。日本の学生や知識層にとって、『キング』をはじめ、多様な雑誌を出版していた「大日本雄弁会講談社」の出版物は、「講談社文化」として名づけられ、低級な文化として扱われたのである。たとえば、「一般人の思想・生活感情の停滞的な側面をつかみ利用し、卑俗な娯楽・実用と忠君愛国・義理人情思想とをないまぜにして注ぎ込む内容のもの」というのが、そうした大衆文化に対する当時の一般的認識であった。⁽¹⁷⁾すなわち、引用の記述には、『キング』と『セルパン』の文化的価値を識別する、という「モダン」文化に対する認識が前提されているのである。それに李箱は、『キング』を読んでいる京城の若者に関して、次のように描写している。

彼一彼は背が低くて可愛らしい男である。眼鏡をかけるのを髪にポマードを塗ることと同じくハイカラであると思う彼は、この間まで鐘路の金融組合で勤務していたという。彼が私をどう思っているのか知らないが、私は彼を本当に人情あふれるいい人であると信じている。彼を蔑視する考えも、資格も自分には秋毫もない。⁽¹⁸⁾

「彼を蔑視する考えも、資格も自分には秋毫もない」という表現の裏面からは、もし李箱自分ではなく、他に「彼」を蔑視する考えや資格がある人がいるとすれば、「彼」は蔑視されても全然不思議ではない、という意味が読み取られる。また、眼鏡をかけていることや京城の繁華街で働いたことを自慢している「彼」を、俗物的な人間として考えるのが当然である、という意味も読み取られる。そうした認識によって、『キング』を読んでいた京城の若者は、直接非難されるわけではないが、文化的に軽蔑される位置に追い込まれることになる。いいかえれば、その差別によって李箱は、流入された「モダン」文化の文化的価値を識別することのできる「モダン」文化受容者に位置されるのである。『キング』と『セルパン』との対比とは、京城の「モダン」文化受容者たちの間で行われた文化的差別の物質的隠喩に他ならない。すなわ

ち、「モダン」文化の受容といえども、それは一枚岩的なものではなかった。もちろん、「モダン」文化の価値を識別する認識自体も、日本経由の「モダン」文化に誰よりも敏感であったから得られたものである、ということを見逃してはいけない。

李箱の意識の中で「モダン」文化の文化的価値の優劣を表象するようになった、『セルパン』と『キング』とははたしてどのような雑誌であったのだろうか、両雑誌の持つ文化的価値に対する認識を中心に考察することにしよう。『セルパン』は第一書房から発行された、当時としては斬新で、洒落た雑誌であった。なにより、64ページの軽装と、表紙のデザインが人目を引いた。⁽¹⁹⁾表紙でいえば、グリーンと黒とを大胆にレイアウトしたり、マチス、ルノアール、ゴッホ、ドランの絵画やいわゆる「芸術写真」が用いられたりしていた。福田清人を初代編集者にして昭和6年5月に創刊された『セルパン』は、その以後、辻野久憲・三浦逸雄・春山行夫・大島豊を編集者にして昭和16年3月まで刊行しつづけられた。特に、李箱が「一番目の放浪」の中でアポリネールのテーマ小説「暗殺された詩人」を読んでいたとする、その『セルパン』は春山行夫が編集を担当していた時期に出たものである。⁽²⁰⁾春山行人は昭和10年から編集を担当するようになったが、この時期の『セルパン』は知的情報のひとつの拠点となったといわれる。春山行夫は執筆者やページを増やし、定価も従来⁽²¹⁾の倍にして総合雑誌の形態をとるようにした。その特色として海外情報に触手をのばし、毎号従来の国内作品に代わって、2、3編の外国文学作品翻訳を抄録などによって紹介した。ジャン・ゲオノ、ノエル・モーガン、ラモン・フェルナンデス、イリヤ・エレンブルグ、オルガス・ハックスリー、ジュリアン・ダーリン、ジャン・コクトー、アンドレ・マルロー、J・P・サルトル、フランツ・カフカなどが載せられ、春山行夫が『詩と詩論』で示した海外文学紹介の方向をさらに前進させたのである。⁽²¹⁾『セルパン』の主読者層は、主に高等学生、大学生などの若者層であった。「初期『キング』の読者層」の研究調査が中心になっている永嶺重敏の『雑誌と読者の近代』には、昭和8年以後(昭和8年～16年)の雑誌読書調査表が載せられている。⁽²²⁾もちろんそれは、『キング』の読書層だけではなく、他の雑誌の状況に関しても参考に値する。その表によると、『キング』が労働者・農民・小学生・中学生・それに在日朝鮮人などの多様で広範囲な大衆読者層に親しまれていたのに対し、『セルパン』の場合は主に専門学校生、高等学校生、大学生、などのいわば若者知識人層に広く読まれたとされている。前にも指摘したように、当時の知識人層にとって『キング』は、「主として田舎で読まれるもの」として認識されていて、その認識は京城の李箱に流入された「モダン」文化の文化的価値の識別基準としても機能していたのである。植民地期の当時、行政・経済的な面で日本の地方都市のように扱われていた京城で、若者が『キング』に夢中になるのは、「主として田舎で読まれるもの」という雑誌の性格から見ると、当然のことであったかもしれない。植民地高等教育を受けた李箱は、『キング』を無視することで(いいかえれば『セルパン』を愛読することで)、一般のモダン青年とは異なるいわば最先端のモダニストとしての自分のアイデンティティーを求めたのではないだろうか。京城の若者たちが眼鏡をかけ『キング』を読むことで、「ハイカラ」(モダン青年)になったと信じていたように、

李箱のようなモダニストたちは『セルパン』から一般のモダン青年と自分たちを区別する根拠を見出そうとしたのである。それが日本の知識層の模倣であったことはいうまでもない。『キング』の対極点に『セルパン』を位置させる、という認識自体が、日本製だからである。このように、当時京城の知識階級に流入された「モダン」文化に対して文化的価値の優劣をつけることで、一般大衆の「モダン」文化への欲望と自分たちの文化的な志向を区別しようとした。しかし、大衆の欲望であれ、知識人の志向であれ、それを充足させるためにできることは、京城の「モダン」文化の源流である東京の「モダン」文化への盲目的な追従だけであった。

3 東京の「モダン」への志向

どうして狂っているというのか。いったい我々は人より数十年遅れていても平気で過ごすつもりなのか。分かってくれないのは私の才能が足りないせいでもあろうが、怠けて遊んでいたことも少しは反省すべきではないか。何本か書いてみて詩を創ることができると思い込んでいる連中とはものが違う。二千点から三十点を選ぶのに汗をかいた。三十一年三十二年のことで龍の頭を出してみても皆がうるさく騒いでいるので、蛇のしっぽのところか鼠のしっぽもつけられずやめなければならないのが残念である。⁽²³⁾

『朝鮮中央日報』（1934年7月24日～8月8日）に連載されていた李箱の連作詩「鳥瞰図」は読者たちの抗議で中断されるようになる。上記の引用は、連載が中断された後、同じく『朝鮮中央日報』に載せられた「鳥瞰図作家の言葉」という文章の一部である。「鳥瞰図」は「詩第一號」から始まって、結局、「詩第十五號」で終わるようになるが、作品の前衛的な傾向と難解さは当時の読者たちから理解されず、「精神病者の寝言」という批難を浴びることになったのである。

しかし、李箱も主張しているように「鳥瞰図」のような形態の詩は当時の日本や西欧では既に試みられていたし、新しい傾向の詩風として位置づけられていた。李箱の書架には『セルパン』の以前から、『詩と詩論』やその後続誌『文学』がそろっており、詩人としては堀口大学や春山行夫の作品を好んでいた。この二人の作家への李箱の関心は、二人の作家が積極的に参加していた雑誌『セルパン』の愛読からも推測される。特に、『詩と詩論』には彼らのほかに、三好達治、西脇順三郎、安西冬衛、竹中郁、近藤東、北川冬彦、上田敏雄などの前衛的な詩人が毎号の詩や評論を発表しているだけでなく、シュルレアリズムをはじめとして当時のヨーロッパの前衛的な絵画や詩の紹介をしていた。⁽²⁴⁾このように、日本からの雑誌や書籍を通じて当時の最先端の話題作に関する知識を持ち、それと競争するかたちで詩作していた李箱の作品が、当時植民地朝鮮の新聞の一般読者たちに受け入れられることが容易ではなかったことは当然であったのかもしれない。

上記の引用からも、李箱の創作目的がもともと一般読者たちに理解されることにあったのではないことが読み取られる。もちろん、李箱は一般読者たちに日本や西欧文学に関する知識を

自慢するために書いたのでもない。ただし、自分の作品は日本や西欧の文学の潮流を熟知していれば、誰にでも納得できる作品として評価されると思っていたのは確かである。つまり、李箱は、京城の最先端のモダニストを自負する知識人たちには、自分自身の詩が理解されることを期待していたのである。それがうまくいかなかったことに対して、李箱は強い不満を披瀝している。

ここで注目したいのは、「我々が人より数十年遅れている」、「遅れては平気でいられない」という表現から窺える、京城の「モダン」に対する李箱の認識である。すなわち、その表現からは強い焦燥感に囚われている認識を読み取ることができる。もちろん、このような認識は李箱だけではなく、「モダン」文化に呪縛されていた誰もが共有したものであろう。京城の「モダン」文化を主導していたモダニストたちに、「数十年遅れている」という焦燥感を与えたのは、いうまでもなく「日本」や「西欧」の「モダン」文化である。

しかし、当時京城に新しく流入される「モダン」文化は、周知のとおり殆ど日本を経由したものであった。従って、朝鮮において日本、京城において東京は、追いかけるべき文化的見本として存在していた。政治・経済・教育などの近代的制度だけではなく、人々の日常生活までが「日本」と「東京」のそれを準拠として意識せざるを得なかった。たとえば、満州事変以後の植民地文化政策や文化状況の変化の中には、京城のダンス・ホールを禁止するという、いわゆる「モダン」生活の規制も含まれていたが、その規制の解禁許可を主張する嘆願書には、主張の根拠として東京におけるダンス・ホール営業の実態が挙げられている。

我々はソウルにダンス・ホールの営業を許可していただきたくて、連名で閣下をお願い致します。(中略)昭和3年には東京警視庁の管内に3箇所であったのが昭和7年には8箇所に激増し、その後からはたとえ東京市内では禁止されていたが、自動車で10分や20分、遠いといっても30分、1時間であればいける埼玉県、千葉県にダンス・ホールが増えて横浜にあるのもあわせると20余箇所もなるし、それに京都、大阪、神戸、別府にあるのまで含んで数えると東京、横浜、京都、大阪、神戸だけでも53箇所もあるそうです。(中略)三橋警務局長閣下よ。なにとぞいち早くソウルにもダンス・ホールを許可させていただいて、我々が東京に行って「フロリダ」や「帝都座」「日米」などで遊びながら味わったような⁽²⁵⁾ 愉快的な気分を六十万ソウルの市民たちも同じく味わうことができるよう、何卒嘆願致します。

この文章は、レコード会社の文芸部長、カフェーの女給、喫茶店の経営者、妓生、女優など、述べ8人による公開嘆願書で、雑誌『三千里』(1937年1月)に載せられたものである。その嘆願書の中には、日本においてのダンスの歴史が、祭りの踊りから鹿鳴館のダンス・パーティーに至るまで詳細に言及されながら、京城のダンス・ホールの必要性が主張されている。嘆願書を出している人たちは、既に東京のダンス・ホールで「愉快的気分」を体験していて、京城でもそれを楽しみたいということで許可を要求しているのだが、彼らが求めているのがただダ

ンス・ホールでの「愉快的気分」であると、簡単にいい切ることはできない。彼らはそれが「東京で感じた愉快的気分」であるからこそ、求めているからである。東京にはあるが、京城にはないもの、それ自体京城の「モダン」生活者にとって、追求すべき「モダン」文化だったのである。李箱の焦燥感も、嘆願者たちの嘆願の理由も、東京にある「モダン」文化が京城にはない、ということへの不満である。日本・東京とは、彼らにとって単なる地名ではない。実際に東京を体験した人にも、経験しなかった人にも、それは一種の羨望や憧憬の空間であったのである。

章煥（吳^オ章煥，1930年代の詩人—引用者）は当時たまたま東京へ行って、初版の豪華版の詩集を収集してくることを趣味としながら自慢にしている、喫茶店に来るときには第一書房から出版された草装の詩集一冊を小脇に抱えて威張ったりするくせがあった。彼はまた詩集を買うついでに京城では買うことも見ることもできない印象派以後の画集までたまたま買ってきたので、それを「貸せよ」、「俺も未だ見てないのに縁起でもないこというな」といざこざの末、お酒を奢らせてもらったあとによろやく宝物のように貸してくれたが、その画集たちは当時我等の世界では宝物であるに間違いなかつた⁽²⁶⁾。

引用で出てくる「第一書房」とは、文芸・学術の美装本を出版する書肆としてユニークな存在であって、前に取りあげた『セルバン』の発行所でもあった。「第一書房」で出版される詩集は、喫茶店を出入りする京城の「モダン」大衆に自慢することのできる品物であると、引用文は伝えている。「自慢」に値する、その詩集から「モダン」大衆は何を求めていたのだろうか。もちろんその「自慢」と憧憬が詩集の内容や芸術的価値とは全く関係ないことはいまでもない。東京から買ってきた「第一書房」の詩集という理由だけで、自慢することができ、憧憬の対象になったのである。特に、画集の場合、それが「京城では見ることも買うことも出来ない」がために、「宝物」としてまで扱われた。「印象派以後の画集」だから「宝物」であったかもしれないが、もしそれが京城で見ることができ、販売されていたとすれば、「自慢」と憧憬の根拠にはなれなかつただろう。京城には存在しないものがある東京、それだけでも当時の京城の人々にとって東京は、憧れの場所であったのである。

「第一書房」の詩集を買ってくることから、李箱が前衛的モダニズム詩作を試みることから、京城のモダニストたちは、東京の「モダン」に学んで追いつくため必死であったことが分かる。その模倣を主導したのは、直接的・間接的に東京の「モダン」文化と接触していた人々である。たとえば、1930年代には、雑誌や映画などの媒体を通じてだけでなく、日本留学から帰国していた若者も増えていて、彼らは東京の「モダン」文化を京城に再現しようと努力したのだ。その模倣こそ彼らにとって単純な模倣ではなく、一種の使命として認識されていたからである。

ここで指摘しておきたいのは、ある意味で使命感に満ち溢れていた「模倣」の担当者たちが、

自分たちはなぜ東京の「モダン」文化を京城に再現しようとするのか、という自己反省的な懐疑には無関心であったという点である。つまり、1930年代京城の「モダン」文化は東京の「モダン」文化を無反省的に憧憬し、模倣することで成立していたのである。

4 むすび

「楽浪」という喫茶店は、1930年代韓国モダニズム文学において特別な場所である。「楽浪」は、京城の「南村」に位置しながらも珍しく朝鮮人によって経営された喫茶店である。主な利用客は「南村」居住の日本人や「モダン」志向の朝鮮の文化人たちであった。⁽²⁷⁾ 李箱をはじめ、当時のモダニスト作家たちも、実際「楽浪」で作品を書いたり、作品の中に出来事の舞台として取り入れたりしていた。つまり、「楽浪」は当時文化人たちにとって一種のサロンのような空間であった。特に、「金曜日ごとに名曲新譜を聴かせること」や「露文豪ツルゲーネフの百年祭を挙げる事」など、「楽浪」が企画した文化イベントは当時京城のモダニストたちの間で評判にもなった。「楽浪」の壁に掛けられていた落書のなかから、当時朝鮮の文化人たちの出入りを確認することができる。

楽浪祭紅白試合 朝鮮軍惜敗

- アントン・チェホフ —— 李泰俊 (棄権)
- O・ヘンリ —— 朴泰遠 (TKO)
- 北園克衛 —— 李箱 (判定)
- 安井曾太郎 —— 金鐘泰 (KO 第2ラウンド)
- 李光洙 —— 菊池寛欠席故不戦勝⁽²⁸⁾

(落書の内容が全て判読できることではない—引用者)

この落書は、いわば「モダン」な空間であった「楽浪」に集まって、談話を楽しんでいた、1930年代朝鮮の文化人たちの面々を思い浮かばせるものである。ここで、その落書の内容に少し注意を払ってみよう。西欧や日本の作家と自分たちとを結んで、「紅白試合」をしている。「朝鮮軍」と西欧や日本の作家とが一人ずつ、文学的傾向の類似性に基づいて組み合わせられ、それぞれの対戦が行われている。試合の結果は、「朝鮮軍惜敗」になってはいるものの、その対戦表から、朝鮮軍、すなわち、朝鮮の文人たちが自分の文学世界を展開することにおいて、常に西欧と日本の文学を仮想的な敵(モデル)として意識していたことを察知することができる。その意識は、羨望・憧憬、または模倣の意識とつながるものであろうが、そこにはまた「惜敗」という敗北感が随伴されずにはいられなかったということを見逃してはいけない。彼らは日本経由の文化を無反省的に憧憬し、模倣しながらも、どうしても後ろめたい気持ち、敗北感を振り払うことができなかつたのである。それで、この敗北感から逃げるために当時朝鮮の文人たちが選んだ方法は、誰よりも早く完璧に見習って追いつくことであつたらう。その

ため、日本、それも当時の先端知識や「モダン」文化の中心地である東京へ行き、それらを直接体験してみることが、彼らを選択した最も一般的な方法であった。したがって、東京体験とは、最先端の「モダン」文化人であることの保証であり、だからそれ自体自慢の種にもなった。彼らの東京体験（実際には留学という形が一般的であった一論者）の目標である、西欧や日本の「モダン」文化に対する敗北感からの脱出は、現実的に、また精神的に、不可能であつたろう。むしろ、東京体験は彼らの敗北感を深める方に機能したと思われる。しかし、その代わりに、東京体験は、彼らに朝鮮の「モダン」文化の最先端に立つための資格を与える同時に、彼らにとって西欧や日本の「モダン」文化に対する「敗北」全体をおぎなうことのできる、収穫でもあったのである。

以上に、植民地都市京城の二重構造と京城に流入された「モダン」文化とその受容の重層性、そして植民地住民たちの認識を当時の文化言説を通じて分析することによって、植民地都市京城における日本の「モダン」文化の受容様相を考察した。京城の「モダン」文化の流入の原因でもあり、結果でもある当時植民地知識人たちの東京体験に関する考察は、今後の課題にしたいと思う。

(注)

- (1) 植民地期の朝鮮人による言説の中で、京城の日本人居住区と朝鮮人居住区をそれぞれ表わす名称として「南村」と「北村」が用いられている。本稿では、京城という植民地都市の二分化された構造を表すために、「南村」と「北村」という概念を取り入れることにする。
- (2) 橋谷弘「植民地都市としてのソウル」(『歴史学研究』614, 1990年12月)などを参照。
- (3) 引用で、京城という名称とともに、「ソウル」が用いられている。「ソウル」は、1910年朝鮮の首都名が京城になる以前から、漢城とともに首都を意味する一般名称として使われていた。ただし、「ソウル」は当時朝鮮人同士の間で通用していた名称であって、「南村」「北村」と同じように「ソウル」という名称も、日本人の文章からは見当たらない。
- (4) 柳光烈「大京城の点景」『四海公論』, 1935年10月号。
- (5) 趙容萬『30年代の文化芸術人』凡洋社出版部(ソウル), 1988年, 67~68頁。
- (6) 具体的な事項に関しては、孫禎睦『日帝強占期都市化過程研究』一志社(ソウル), 1996年, 379~383頁を参照。
- (7) 当時京城に建てられた近代式建築物の所在や構造などに関しては、孫禎睦『日帝強占期都市社会相研究』一志社(ソウル), 1996年, 100~101頁を参照。
- (8) 同書, 87頁参照。
- (9) 1930年の「モダン語辞典」(『新民』1930年9月号)には「モダン」に関して、「モダン(modern)一語意は「新しい」もしくは「近代的」であるということ。それで「モダンガール」であれば新しい女性もしくは近代女性, 「モダンボーイ」であれば同じ意味の男性の場合に使う。意味としては決して悪い言葉ではない。「モダンボーイ」や「モダンガール」というと軽蔑や嘲笑の意が含まれている。それで不良少女または不良少年という意味としても通じるのが事実である」との記述がある。
- (10) 壬寅生「モダニズム」『別乾坤』, 1930年1月号。
- (11) 大宅壮一「1930年の魅力」『大宅壮一全集 第2巻』英潮社, 1981年, 108頁。
- (12) 越沢明『東京の都市計画』岩波新書, 1991年, 84頁参照。

- (13) 李箱（1910～1937）は韓国文学史において最高のモダニズム作家として評価されている。京城高等工業学校建築科を卒業し、朝鮮総督府内務局建築技師として働いたが、結核で退職。1936年10月東京へ渡るが不逞鮮人として投獄され、翌年4月持病の悪化で死亡する。
- (14) 李箱「一番目の放浪」『李箱文学全集3』文学思想社（ソウル）、1993年、158頁。
- (15) 『セルパン』は、「蛇」またはそれから転じて「叡智」の意味をもつフランス語、Le Serpent によっている。「蛇」は第一書房のマークでもあった。
- (16) 『キング』は、1980年代半ばのころから、関東大震災以後のモダニズムに即応する「新しいナショナリズム」のマスメディアとして再検討されるなど、研究が盛んに行われている。それに対し、『セルパン』に関しては、日本でも簡単な紹介は行われてはいるものの、本格的研究はいまだ行われていない状態である。
- (17) 佐藤卓巳「キングの時代」『大衆文化とマスメディア』岩波書店、1999年、208頁参照。
- (18) 李箱「一番目の放浪」『李箱文学全集3』文学思想社（ソウル）、1993年、155頁。
- (19) 堀江真喜夫「創刊当時の『セルパン』」『日本古書通信』第41巻第5号、日本古書通信社、1976年、10頁参照。
- (20) 現在までの研究で、随筆「一番目の放浪」の創作時期は、1935年8月に推測されていたが、『セルパン』にアポリネールのテーマ小説が載せられたのが1935年9月号であることから、9月以後であることが確認される。『セルパン』は毎月1日に発行されていたし、京城では大阪屋号書店と特約し販売されていた。
- (21) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』講談社、1977年、231頁参照。
- (22) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、240～246頁参照。
- (23) 『李箱文学全集3』文学思想社（ソウル）、1993年、353頁。
- (24) 三枝壽勝「李箱のモダニズム—その成立と限界」『朝鮮学報』第141輯、1991年、119頁参照。
- (25) 李瑞求外「ソウルにダンス・ホールを許せ」『三千里』、1937年1月、162頁。
- (26) 金光均「30年代の画家と詩人たち」『金光均文集臥牛山』汎洋社出版部（ソウル）、1985年、172～173頁。
- (27) 雑誌『博文』（1938年10月、46頁）「京城茶房盛衰記」には、当時の喫茶店文化に関して書きながら、「楽浪」を次のように言及している。「京城茶房文化史の第二期は、東京美校図案科を卒業して和信に勤めていた李順石氏が長谷川町に「楽浪バーラー」を開業したことから始まる。この茶店は現在でも繁昌しているようであるが、当時においては成功するとは思われていなかった茶房経営において見事に収支を合わせたことで有名になった。その成功の主たる要因を考えてみるならば、場所を大胆に決めたことが意外にも成功し内地人を多く惹きつけたこと、また鐘路近隣の茶店の最大の弊害であった妓生や酔っぱらいの出入りを殆どなくし、茶客の趣味に相応しい雰囲気を実現させることが出来たことなどが考えられる。」
- (28) 『李箱小説全集』甲寅出版社（ソウル）、1978年、3頁に載せられている写真から引用者が読み取ったものである。